2024年10月13日（日）主日朝礼拝説教

『道、真理、命』　井上隆晶牧師
ヘブライ人への手紙10章19～25節、ヨハネによる福音書14章1～9節

❶【天国に場所を用意するとは？】

ヨハネ福音書14章～17章まではイエス様の最後のお別れの説教です。13章でイエス様は「**私が行く所に、あなたたちは来ることができない**」（13：33）と語られ、弟子たちから去ってゆく事と、弟子たちが裏切る事を語られました。それを聞いた弟子たちは不安で一杯になりました。そこで「**心を騒がせるな。神を信じなさい。そして私を信じなさい。**」（同 14：1）と言われ、彼らが安心するように「**私の父の家には住む所がたくさんある。…行って、あなたがたのために場所を用意したら、戻って来て、あなたがたを私のもとに迎える。こうして、私のいる所に、あなたがたもいることになる。**」（同14：2～3）と言われました。父の家とは天国、神の国です。イエス様はそこから来たわけですから、そこへ帰ろうとしているわけです。**イエス様にとって死とは故郷の実家に帰ることに過ぎません。**人間が不安になるのは、この世が本番で天国がおまけだと思っているからです。パウロが言うように「**私たちの本国は天にあります**」（フィリピ 3：20）。私たちも同じように天国からこの世に出稼ぎに来ているのです。出稼ぎ先なので、完全な平安がないのです。故郷にこそ完全な平安があります。向こうが本国、本番です。イエス様は先に故郷に帰り、弟子たちの住む場所を用意したら戻って来て、故郷の家に迎える、そしてずっと一緒に住むことになると言われたのです。私はこの個所の意味がずっと分かりませんでした。「天国には住む場所がたくさんあるのに、イエス様はどうして場所を用意しなければならないのだろう。何を用意するのだろう。」と思ったのです。面白い事に4世紀のアウグスティヌスも同じ疑問を持っていました。

●先日、朝の祈りの時に詠んだ詩編90に「**主よ、あなたは代々にわたしたちの宿るところ。**」（90：1）とありました。口語訳では「**主よ、あなたは世々われらの住みかでいらせられる。**」NIV は「Lord,you have been our dwelling place throughout all generations.」です。**人は神の中に住むのであって、神ご自身が天国なのです。天国に入るという事は、神の中に入るという事です。だから天国に人の住む場所を用意するということは、神ご自身の中に準備するという意味になります。**この話を主が十字架にかかる前にされたという事は、キリストの死と復活が場所が用意することなのだと教えているのです。**つまりキリストは十字架と復活によって、人間性から罪と死を取り除き、人が神の中に永遠に住む準備をされたという意味なのです。**言い換えれば、花婿であるキリストが花嫁である人間を家に迎え入れるために、花嫁の汚れを洗って清めたのです。神は人となりました。キリストの中で神と人が一つに結ばれ、一体の夫婦となり、家族となったのです。妻が結婚して初めて夫の実家に行くように、キリストと結ばれた人（信者）は、初めて夫であるキリストに連れられて、彼の実家に、つまり天国に迎え入れ

られる者となるのです。私はそのようにここを理解しています。

❷【道、真理、命であるキリスト】

トマスが「**主よ、どこに行かれるのか、私たちには分かりません。どうしてその道を知ることが出来るでしょう**」（14：5）と尋ねたので、イエス様は「**私は道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、誰も父のもとに行くことができない。**」（14：6）といわれました。有名な言葉です。**この三つのものは神のものですから、彼は自分のことを神であるといわれたのです。**実際、この後にフィリポが「**わたしたちに御父をお示しください**」（14：8）と言うと、「**こんなに長い間一緒にいるのに、わたしが分かっていないのか。わたしを見た者は、父を見たのだ。**」（14：9）と言われ、ご自分と父なる神が一体であることを示されました。これは位格を言ったものではなく、神性を言ったものです。父と子は別の者ですが、神性において同質だからです。**イエス様自身が父なる神とつながっている唯一の「生きた道」です。人間が神へ帰る道が分からなくなったので、天から地上にその道を敷いてくれた、いやその道自身が来たのです。**このイエス様という「道」を歩いて行けば、必ず父なる神のもとに行くことができます。**私たちは一人でこの道を歩くのではありません。キリストと一体になってこの道を旅するのです。**弟子たちもそうでした。エマオの旅人のように道に迷ったらキリストが引き戻してくれました。内に住むキリストが「右だ、左だ」と教えてくれます。また、イエス様自身が真理です。彼は神だからです。神以外に一体誰が真理を持っているでしょう。**イエス様を知ることは真理を知ることになります。**また、イエス様は自分のことを「**命**」と言われました。これも神の別名です。この世の中には命はありません。命とはキリストのことです。「**あなたたちは聖書の中に永遠の命があると考えて、聖書を研究している。ところが聖書は私について証しをするものだ。それなのにあなたたちは命を得るために私の所へ来ようとしない。**」（ヨハネ 5：38～40）キリストをいくら研究しても意味がありません。キリストは食べるものです。（ヨハネ 6：48～）イエス様を食べて一体になることが命になるのです。

❸【キリスト教は道であること】

キリスト教に対する最も古い呼び名の一つは「**道**」でした。使徒言行録にはこう書かれています。「**その頃、この道について容易ならぬ騒動が起こった。**」（使徒 19：23）、カエサリアのローマ総督フェリクスは「**この道のことを相当わきまえていた**」（使徒 24：22）と書かれています。何百冊というキリスト教について書かれた本を読んだとしても、自らがその道に入り、その道を歩き出し、歩き続ける事をしなければその道を歩んだことにはなりません。知っているのと歩いたのとは違うのです。日本人はそのことをよく知っていて、剣道、柔道、茶道、華道など、不思議なようにすべてのものに「**道**」という字をつけました。キリスト教も同じです。信仰というものを勉強することだと誤解している人がいますが、信仰は実践であり、体験です。某教会の牧師が卒論にアウグスティヌスの三位一体論を書き

ました。私はその先生に「三位一体は机の上で勉強するものではなくて、祈祷の中で唱えるものです。」といいました。そのことを私は正教会の修道の祈祷で学びました。神は学ぶものではなく拝むものです。キリストを知りたかったら、すぐに洗礼を受け、聖書を読み、祈祷することから始めなければなりません。

●教父たちは言っています。「自分自身を救い、永遠の命を得たいのならば、朝、目を覚ました時、父と子と聖霊のみ名によって、アーメンと言いながら、十字架のしるしを切りなさい。信仰は考えることによってではなく、実行することによって得られる。言葉や考察ではなく、体験が神を教えてくれる。窓を開けない限り、新鮮な空気は部屋に入らない。日光浴をしない限り、肌は黒くならない。信仰を得ることも同じである。ただ楽に腰かけて待っているだけでは、私たちは目標に達することはできない。放蕩息子をまねよう。彼は立って、出発した。」

先日、列王記を読みました。皆さんは破壊する力と、創造する力とどちらが強いと思いますか？破壊する力だと思うかもしれませんが、創造の力なのです。エルサレムはバビロンによって徹底的に破壊されましたが、70 年後に突然、民は解放され国は復興しました。ローマ帝国もキリスト教を迫害しましたが、300 年後にキリスト教を国教にしました。また太平洋戦争の時も日本のキリスト教は迫害されましたが、その政権は長く続かず、再び信仰の自由を得ることになりました。**破壊者はことごとく消え去り、創造してゆく力が残ったのです。**それは私たちの日常でも分かることです。**何かを作っている時は楽しいものです。教会や家を造っている時は楽しいのです。創造力は神から来ているからです。一方、破壊している時（人間を、家庭を、戦争）は、その最中も、後もものすごい空しさを覚えます。それは悪魔から来た力だからです。**イエス様はその体が破壊されても三日目に復活しました。創造力が、破壊力に勝った瞬間です。何をしても無駄でした。神には勝てません。**人間から出たものは必ず消えてゆきますが、神から出たものは永遠に残ります。創造力がいつまでも続き、最後まで残るのです。**私たちは悪の諸霊（悪魔と悪霊）と、彼らが人間に与える破壊する力と戦わなければなりません。私たちが召されたのは神を世に証し、悪魔の業に勝つためです。私たちが恐れなければならないのは、周りの環境が悪くなることではありません。神の創造の力が信じられなくなることです。

神は私たちの中に新しい創造の業を始められました。それは今日も続いています。だから神様は楽しいはずです。神の創造は終わりません。2 世紀のエイレナイオスによれば、すべての人はキリストに結ばれて一人の人となり、万物はキリストのもとに集められ、再統合します。こうして世界は完成します。何というスケールの大きな救いでしょう。このキリストと共に歩む道は何と楽しい事でしょうか。「神に従う人の道は輝き出る光、進むほどに光は増し、真昼の輝きとなる。」（箴言 4：18）どうかこの道から離れることなく、ますますこの道を歩む者となりますように祈ります。